

『枕草子』 〈ゆかし〉 考

李泰勲*

目 次

はじめに

- 一 『枕草子』における 〈ゆかし〉
- 二 平安女流日記における 〈ゆかし〉
 1. 『和泉式部日記』における 〈ゆかし〉
 2. 『紫式部日記』における 〈ゆかし〉
 3. 『更級日記』における 〈ゆかし〉
 4. 『讃岐典侍日記』における 〈ゆかし〉

おわりに

はじめに

〈ゆかし〉は「心が対象へ自然にひかれていきまを表す²⁾」ことばで、文脈に応じて見たい、知りたい、聞きたいというふう¹⁾に現代語訳できる。したがって、この〈ゆかし〉ということばにはその主体となる人物の、対象に対する好奇心や関心の気持ちが現れていると言える。という

ことは〈ゆかし〉の対象への考察はその主体となる人物がどのようなものに心がひかれているかを知るひとつの手がかりとなるということが言えよう。

次は『枕草子』 「とくゆかしきもの」の段である。

* 檀國大学校 講師 日本古典文学 (中古)

1) 中村幸彦 岡見正雄 阪倉篤義 編 『角川古語大辞典』による。

とくゆかしきもの 巻染、むら濃、くくり物など染めたる。人の子生みたるに、男女とく聞かまほし。よき人さらなり。えせ者、下衆の際だになほゆかし。除目のつとめて。かならず知る人のさるべきなきをりも、なほ聞かまほし。(153 とくゆかしきもの)

一 『枕草子』における〈ゆかし〉

では、作品内の〈ゆかし〉の用例を用例 1 から見ていくことにしよう。

用例 1 用例 2 (153 段²⁾)

〈ゆかし〉の用例 1 や用例 2 の主体は作者清少納言である。そして、「染め物の出来具合」「出産の結果」「除目の結果」がその対象になっている。そして「染め物の出来具合」はものの形態、「出産の結果」「除目の結果」は「人事の内容」と言えるので、主体の作者清少納言の関心や好奇心の方向が、「染め物の出来具合」である場合は「ものごとの表面」に、「出産の結果」「除目の結果」である場合は「ものごとの内容」に関心や好奇心が向けられていると言える。ところが、この用例 1 ははじめにのところで言及したように、三つの対象の中で表面的側面を持つ「染め物の出来具合」を表す対象がその羅列において優先されていることが分かり、このような点から作者の関心が表面的な対象に優先的に向けられているということが言えよう。そして用例 2 は、その対象が出産の結果であることから、〈ゆかし〉の主体の関心や好奇心が「ものごとの内容」に向けられていると言える。

用例 3

若きは、物もゆかしからむ。女などのある所をも、などか忌みたるやうに、さしのぞかずもあらむ。それをもやすからず言ふ。(5 思はむ子を)

用例 3 の場合、〈ゆかし〉の主体は若い法師である。対象は世間一般のあらゆることとなるので、その属性は複合的な側面を持つと言えよう。

用例 4

春の歌、花の心など、さいふいふも、上藤二つ三つばかり書いて、「これに」とあるに、
年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし
といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覧じくらべて、「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と仰せらるるついでに、(21 清涼殿の丑寅の隅の)

²⁾ 用例 1、2 の本文はすでに本論文の「はじめに」のところ(1頁)に引用してあるので、ここでは省略することにする。

用例 4 の場合、〈ゆかし〉の主体は中宮定子である。対象は古歌を書き改めるような作者の機転であるから、ものごとの内容と言える。したがって〈ゆかし〉の主体である中宮定子の関心や好奇心はものごとの内容に向けられていると言える。このような人間の機知を対象にしている点は、やはり機転をかかすようなやりとりの逸話が多く載っている『枕草子』ならではの〈ゆかし〉の対象と言えよう。

用例 5

人の国よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそ思ふらめ、されど、それはゆかしき事どもをも書きあつめ、世にある事などをも聞けばいとよし。(23 すさまじきもの)

用例 5 の主体は地方の人で、対象は後ろの文章から、京からの手紙に書いてある「世にある事」であることが分かるので、ものごとの内容と分類できよう。

用例 6

物うらやみし、身の上嘆き、人の上言ひ、つゆ塵の事もゆかしがり聞かまほしうして、言ひ知らせぬをば怨じそしり、またわづかに聞き得たる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらぶるもいとにくし。(26 にくきもの)

用例 6 の主体は不特定人物である。この不特定の人物が他人の事情を知りたがるので〈ゆかし〉の対象は他人の事情というものごとの内容になり、これもまた、ものごとの内容に関心や好奇心が向いている言えよう。

用例 7

猿沢の池は、采女の身投げたるを聞しめして、行幸などありけむこそ、いみじうめでたけれ。「寝くたれ髪を」と、人麻呂がよみけむほどなど思ふに、言ふもおろかなり。御前の池、また何の心にてつけけるならむとゆかし。(36 池は)

用例 7 の〈ゆかし〉の主体は作者清少納言である。「御前の池」という池の名前の由来について「知りたい」になるので、〈ゆかし〉の対象はものごとの内容になり、作者の関心や好奇心がものごとの内容的な面に向けられていると言える。

用例 8

「いみじうちをし。この山の果てを知らでやみなむ事」と、まめやかに思ふ。こと人も「げにゆかしかりつるものを」など言ふを、御前にも仰せらるるに、「同じくは言ひ当てて御覽ぜさせばや」と思ひつるにかひなければ、御物の具どもはこび、いみじうさわがしきに合はせて、(83 職の御曹司におはしますころ、西の廂に)

清少納言は、十二月十日頃作った雪山が正月十日過ぎまで残ると中宮の前で予想をする。この予想が当たるようにと祈っている中、正月三日中宮が内裏へ参内することになる。この山の行く末を見届けなくなった清少納言は「いみじくちをし。この山の果てを知らでやみなむ事」と残念がるが、このように残念がるのは作者だけでなく、他の女房たちも「げにゆかしかりつるものを」と残念がり、他の女房たちのこの雪の山の結果への関心も窺うことが出来る。「この山の果てを知らでやみなむ事」という文に続く「げにゆかしかりつるものを」という女房たちの言辞という呼応関係から、この女房たちの〈ゆかし〉の対象は、作者清少納言と同じく「山の果て」という事の結果であることが分かる。したがって用例 8 の〈ゆかし〉の主体は、作者を除いた定子サロンの女房たちで、対象の属性はものごとの内容であることになる。

用例 9

「左近中将、みな着きたまへ」と言へど、さる人も見えず。六位など立ちさまよへば、「ゆかしからぬ事ぞ。早く過ぎよ」と言ひて、行きもて行く。道も祭のころ思ひ出でられてをかし。（9 5 五月の御精進のほど）

五月の御精進のころ、郭公の声を聴きに出かけた清少納言らは、賀茂の奥へ向かう途中、騎射の演習が行われるところを通ることになる。この演習の模様を「しばし御覧じておはしませ」との要請に対して、「ゆかしからぬ事ぞ」と言っているのであるから、〈ゆかし〉の対象は騎射の演習の模様となり、これはものごとの表面、形態と分類できよう。したがって、この用例 9 の〈ゆかし〉の主体は清少納言、対象の属性はものごとの表面と言え。そして、「ゆかしからぬ事ぞ」と清少納言たちが否定形で言っている理由を考えると、それは「さる人も見えず」と大した顕官の人たちが見当らないことがその理由となる。こういう点から、この用例が否定形ではあっても作者および女房たちの身分の高い人たちへの高い関心度が窺えると言え。

用例 10・用例 11

「その柱と屏風のもとに寄りて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたまはするに、うれしく、ゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣ども、紅の打ちたる御衣三重が上にただひき重ねて奉りたる。「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。え着ぬこそくちをしけれ。今は紅梅のは着でもありぬべしかし。されど萌黄などのにくければ、紅に合はぬか」などのたまはすれど、ただいとぞめでたく見えさせたまふ。奉る御衣の色ごとに、やがて御かたちのにほひ合はせたまふぞ、なほことよき人もかうやおはしますらむとゆかしき。（10 0 淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など）

御調髪のおり、清少納言は中宮から「淑景舎は見たてまつりたりや」と聞かれる。正面

から拝見したことの無い旨を申すと「みそかに見よ」と言われる。このような対話の流れから「ゆかしさまさ」るようになるのであるから、この〈ゆかし〉の対象は淑景舎藤原原子の容姿になり、これもまたものごとの表面、形態と言える。したがって、用例10の〈ゆかし〉の主体は清少納言で、対象の属性はものごとの表面、形態と言える。

用例11は、「奉る御衣の色ことに、やがて御かたちのにほひ合はせたまふ」という中宮定子の容貌に関する叙述の後に、つづく「ことよきひと」すなわち原子に対する〈ゆかし〉であるから、この対象も原子の容貌となり、ものごとの表面、形態と分類出来よう。したがって用例11の〈ゆかし〉の主体は作者清少納言で、対象の属性は原子の容貌というものごとの表面、形態になろう。

用例12

「あれは誰そや。かの御簾の間より見ゆるは」とがめさせたまふに、「少納言が物ゆかしがりて侍るならむ」と申させたまへば、「あなはづかし。かれは古き得意を。いとにくげなるむすめども持たりともこそ見はべれ」などのたまふ御けしき、いとしたり顔なり。(100 淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など)

用例11・12の本文のエピソードで記述された通り、屏風に寄り添って、淑景舎を拝見することを許された清少納言は、そのようにして、淑景舎を含む中宮一家の栄華な一こまの鑑賞にふけている最中、お食事のおりになり、へだての屏風は取り払われ、道隆に見つかってしまう。中宮定子はこれに対して「少納言が物ゆかしがりて侍るならむ」と説明をする。このように、中宮のこのセリフがあるまで、中宮一家の一人一人の風貌や振る舞いの拝見、すなわち見る行動をしていたので、この中宮のセリフの中の〈ゆかし〉も、中宮一家の容貌や振る舞いというものごとの表面、形態が対象の属性になることが分かる。ということで、この用例12の〈ゆかし〉の主体は、中宮のセリフではあるが、その中の清少納言が主体で、対象の属性はものごとの表面になると言える。

用例13

顔知らずは誰ならむと、ゆかし。知りたるは、「さなめり」と見るもをかし。若き者どもは、とかく局どものあたりに立ちさまよひて、仏の御方に目も見入れたてまつらず。別当など呼び出でて、うちさきめき物語して出でぬる、えせ者とは見えず。(116 正月に寺に籠もりたるは)

ここでは、昼間の貴人たちの家族や供人づれの礼拝の様子を描写しながら、その一行の中の「顔知らぬ」は「誰ならむとゆかし」と記述している。このような場合の作者の〈ゆかし〉は、その関心や好奇心が「誰ならむ」と誰であるかに向けられているので、これもものごとの内容と言える。したがって、用例13の主体は作者、対象の属性はものごとの内

容と分類できる。

用例 1 4

いみじう心づきなきもの 祭、禊など、すべて男の物見るに、ただ一人乗りて見るこそあれ。いかなる心にかあらむ。やむごとながらずとも、若きをのこなどのゆかしがるをも、引き寄せよかし。(117 いみじう心づきなきもの)

ここでは、不特定の男性貴族の一人で車に乗って見物する行動を作者は「こころづきなし」と評している。続いて、「やむごとながらずとも、若きをのこなど」の〈ゆかし〉の主体についての叙述となっているので、この〈ゆかし〉の対象の属性は、不特定の男性貴族の見物の対象と同じく「祭り、禊など」のような、ものごとの表面、形態となることが分かる。したがって、用例 1 4 の主体は「若きをのこなど」で、対象はものごとの表面、形態と分類できる。

用例 1 5

好き好きしき心ある上達部、僧綱などは、誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり申したまふに、上の、「このわたりに見えし色紙にこそ、いとよく似たれ」とうちほほゑませたまひて、(132 円融院の御果ての年)

物忌み中、藤三位に送られた差出人不明の手紙の送り主が誰であるのか詮索をする叙述にこの〈ゆかし〉が使われている。藤三位の関心や好奇心はその手紙の送り主が誰であるかに向けられているので、この場合の〈ゆかし〉の対象の属性は、ものごとの内容と言える。したがって、用例 1 5 の〈ゆかし〉の主体は、藤三位で対象の属性はものごとの内容と分類できる。

用例 1 6

時司などは、ただかたはらにて、鼓の音も例のには似ずぞ聞ゆるをゆかしがりて、若き人々二十人ばかりそなたに行きて、階より高き屋にのぼりたるを、これより見あぐれば、ある限り薄鈍の裳、唐衣、同じ色の単襲、紅の袴どもを着てのぼりたるは、いと天人などこそえ言ふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。(155 故殿の御服のころ)

道隆の忌中、六月大晦日の祓を受けるため太政官庁の朝所に移っていた頃、初めてこのようなところに泊まることになった女房たちは翌日、普段と違う鼓の音に好奇心を覚え、階段を登って鐘楼まで見に行く。この時、女房たちの、鼓の音に触発された好奇心は、「どのような形のものから、このような音がするのだろうか」ということなので、この女房たちの〈ゆかし〉の対象は、鼓のかたちすなわち、ものごとの表面ということになろう。したがって、用

例 1 6 の 〈ゆかし〉 の主体は女房たちで、対象の属性はものごとの表面、形態と分類できる。

用例 1 7

しばしありて、さき高う追ふ声すれば、「殿まゐらせたまふなり」とて、散りたる物取りやりなどするに、いかでおりなむと思へど、さだにえふとも身じろかねば、いますこし奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳のほころびよりはつかに見入れたり。(177 宮に はじめてまゐりたるころ)

作者清少納言の初出仕の回想記録であるこの章段で、宮中に慣れ親しんでいる人々の様子が作者の目に羨ましく映っている中、先払いの音が聞こえる。藤原道隆の訪問のようで、みんなあわただしく準備する中、作者は退出を考える反面、好奇心がわき上がりひそかにその様子を見てしまう。このような場面で、〈ゆかし〉が使われている。この叙述の前にも後ろにも表面的な情景描写がなされていること、そして、その〈ゆかし〉の結果、「はつかに見入れ」てしまう作者の行動から、この〈ゆかし〉の対象は表面的な男性貴族の容姿ということになり、その対象の属性はものごとの表面、形態と言える。したがって、用例 1 7 の 〈ゆかし〉 の主体は作者清少納言、対象の属性はものごとの表面、形態と分類できる。

用例 1 8

人の臥したるに、物へだてて聞くに、夜中ばかりなうちおどろきて聞けば、起きたるなりと聞えて、言ふことは聞えず、男もしのびやかにうち笑ひたるこそ、何事ならむとゆかしけれ。(190 心にくきもの)

夜中、ものを隔てて聞こえる男の笑い声を聴いて、どのような内容の話をするのだろうと好奇心を覚える場面でこの〈ゆかし〉が使われている。したがって、用例 1 8 の主体は作者清少納言で、対象の属性はものごとの内容と分類できる。

用例 1 9

うれしきもの まだ見ぬ物語の一を見て、いみじうゆかしとのみ思ふが、のこり見出でたる。さて、心おとりするやうもありかし。(258 うれしきもの)

ここでは、まだ読んだことのない物語の一卷目を読んでから、その物語の続きの内容が〈ゆかし〉の対象になっているのであるから、ここでも〈ゆかし〉の対象の属性はものごとの内容と言える。したがって、用例 1 9 の 〈ゆかし〉 の主体は作者清少納言で、対象の属性はものごとの内容と分類できる。そして、この〈ゆかし〉から、主体の作者清少納言の

書物に対する関心を窺うことができよう。

用例 2 0

御文は大納言殿取りて、殿に奉らせたまへば、引き解きて、「ゆかしき御文かな。ゆるされはべらば、あけて見はべらむ」とはのたまはすれど、「あやふしとおぼいためり。かたじけなくもあり」とて、奉らせたまふを、取らせたまひても、ひろげさせたまふやうにもあらず、もてなさせたまふ御用意ぞありがたき。(260 関白殿、二月二日に、法興院の)

二条の宮に滞在することになった中宮が道隆の訪れを受けたところに、一条天皇の使者が手紙を持ってくる。この手紙に対して、道隆は「ゆかしき御文」と関心を寄せていることが分かる。この手紙に対する関心は、手紙の形態よりは、その手紙の内容に向けられていると判断されるので、この用例 2 0 の〈ゆかし〉は、主体は道隆で、対象は手紙という書物の内容、その属性はものごとの内容と分類できる。

用例 2 1

まいて、うちほほゑむところはいとゆかしけれど、遠うゐたるは、黒き文字などばかりぞ、さなめりとおぼゆるかし。(275 常に文おこする人の)

同僚の人に、手紙が届いて、その手紙の形は見えるけど内容までは知るべきがない。その手紙を読みながらにこにこしているのを見て、作者は〈ゆかし〉と記している。ということで、〈ゆかし〉の対象は手紙の形ではなく、そこに書いてある文字を通してしか知らない〈内容〉になっていることが分かる。したがって、用例 2 1 の〈ゆかし〉は主体が作者清少納言で、対象の属性はものごとの内容と分類できる。

用例 2 2

よき人のおはしますありさまなどの、いとゆかしきこそ、けしからぬ心にや。(284 宮仕へする人々の出であつまりて)

作者清少納言は、この段で宮仕への女房同士の共同生活という、退出時の里に対する理想を述べている。そのような生活の場で話題にしたいのは総じて「よき人のおはしますありさまなど」であることが、最後の〈ゆかし〉を含む文章から窺うことが出来る。そして、その〈ゆかし〉の対象なるものもまたこの「よき人のおはしますありさまなど」となっている。そして、その「おはしますありさま」は、この段の最初に記されている「おのが君々の御事」「宮の内」「殿ばらの事」でまとめられていると言えよう³⁾。このような「ありさま」には、内容的なものはもちろんのこと、本作品のあらゆるところに記述されている貴人の外見描写か

3) この個所からも清少納言の身分の高い人々への高い関心度が窺われると言える。

ら、形態的なものをも含めていると判断される。したがって、この用例 22 の〈ゆかし〉は、主体は作者清少納言で、対象の属性はものごとの表面、形態、内容の両方と分類できる。

これまで考察してみた『枕草子』〈ゆかし〉の全用例を主体、対象、対象の属性、関心の動機別に分類して表にしてみると次のようになる。

〈表-1〉『枕草子』における〈ゆかし〉の全用例

用例	段数	主体	対象	対象の属性	動機
1	153	作者	染め物の出来具合(優先) 出産の結果・除目の結果	表面・内容	表面観察(優先) 内容認識
2	153	作者	出産の結果	内容	内容認識
3	5	若い法師	世間一般事	複合	複合
4	21	中宮定子	清少納言の機知	内容	機知の享受
5	23	地方の人	手紙に書いてある「世にある事」	内容	内容認識
6	26	不特定他人	他人の身上	内容	内容認識
7	36	作者	池の名称の由来	内容	内容認識
8	83	他の女房	雪山の賭けの結果	内容	内容認識
9	95	作者および同行女房	競射演習の模様	表面	表面観察
10	100	作者	淑景舎の外見	表面	表面観察
11	100	作者	淑景舎の外見	表面	表面観察
12	100	作者	淑景舎および中宮一家の人々の 外見、振る舞い	表面	表面観察
13	116	作者	礼拝中の顔の知らぬ人の身元	内容	内容認識
14	117	不特定男性貴族	祭り、禊などの様子	表面	表面観察
15	132	藤三位	手紙の差出人	内容	内容認識
16	155	女房	鼓の形	表面	観察
17	177	作者	男性貴族の容姿	表面	観察
18	190	作者	笑い声の理由	内容	内容認識
19	258	作者	物語の続き	内容	内容認識(書物)
20	260	藤原道隆	手紙	内容	内容認識(書物)
21	275	作者	手紙	内容	内容認識(書物)
22	284	作者	身分の高い人の生活	複合	複合

これを見ると全体用例の 22 例中、その対象の属性が内容的側面を持つ場合が 13 例、表面的側面を持つ場合が 8 例、そして複合的側面を持つ場合が 2 例という結果が出る。これにより、『枕草子』の〈ゆかし〉はその数も多く、そして対象もとても多様であることが言えよう。

そして、内容的側面を持つ 12 の用例中、書物を通して内容を認識する用例が 4 例と最も多く、本作品においての書物に対する関心や興味が窺われるのではないかと思われる。そして、表面的側面を持つ 8 例中 4 例が人間を対象にしており、しかもその人間の表面的部分に関心が向けられているということも興味深いことであろう。

今度は、このような〈ゆかし〉の用例中作者を主体に持つ用例について考えてみることにする。

作者を主体に持つ用例は、全用例 22 例中 13 例が存在する。この 13 例中内容的な側面を持つ用例が 7 例、表面的側面を持つ用例が 6 例⁴⁾そして複合的な側面を持つ用例が 1 例という結果が出る。

このような結果から、作者を主体に持つ〈ゆかし〉の用例においても、全用例と同じくあらゆるものにおいて好奇心を持っていることが言えよう。そして、この表面的側面を持つ対象の 6 例中 5 例が人間を対象にしておりその人間の服装、容貌、振る舞いなど人間の表面的な部分にこの〈ゆかし〉が使われていることが分かる。しかもこの対象になる人間は、男性女性ともに高い身分に属している人々であることが分かり、こういう点からも高い身分の人々に対する作者の高い関心度を読み取ることが出来よう。そしてこのような人間に対する関心はその人間の内面まで入り込まず、表面に向けられていることが『枕草子』の〈ゆかし〉の一特徴として挙げることができよう。

二 平安女流日記における〈ゆかし〉

これからは同時代の女流日記における〈ゆかし〉の用例を見てみることにしよう。この女流日記の用例を調べてみた結果、『蜻蛉日記』に 0 例、『和泉式部日記』に 1 例、『紫式部日記』に 1 例、『更級日記』に 12 例、『讃岐典侍日記』に 5 例存在することが分かった。まず、『和泉式部日記』の〈ゆかし〉から見ていくことにしよう。

1. 『和泉式部日記』における〈ゆかし〉

4) 否定用例の用例 9 までを含めての結果。用例 9 は否定用例ではあるが、その動機において十分作者および女房たちの男性貴族に対する高い関心度を読み取れるので含めることにする。

『和泉式部日記』には〈ゆかし〉の用例が1例存在する。

いとくも変はる御心かな。人の言ふことありしを、よもとは思ひながら、『思はましかば』とばかり聞こえしぞ」とあるに、胸すこし開きて、御気色もゆかしく、聞かまほしくて、「まことにかくもおぼされば、

今の中に君来まきなむ恋しとて名もあるものをわれ行かむやは」

と聞こえたれば、

「君はさは名のたつことを思ひけり人からかかる心とぞ見る

これにぞ腹さへ立ちぬる」とぞある。〔二三〕宮邸入りの決意一小波乱

『和泉式部日記』の〈ゆかし〉の主体は「女」、つまりこの作品の作者本人で、対象は「宮の御けしき」となっている。他の男性との噂が立っている作者の「女」は、「御気色もゆかしく」と「宮」の敦道親王の御けしきが〈ゆかし〉と書き記している。〈けしき〉は、人間に使われる場合、「心のあり方が外見、すなわち表情や態度にあらわれたもの⁵⁾」を意味するので、このような場合は人間の「外見、表情、態度」といった表面、形態的な側面と、「心のありかた」という内面心理というふうに両方の側面が同時に〈ゆかし〉の対象になっていることが分かる。そして、このような人間の外見と内面心理といった表面、内容両方における関心や好奇心は、次に続く「今の中に君来まきなむ恋し」とその人に直接会うことへの希望がその根本的な動機となっていることも、この作品における〈ゆかし〉を特色づける一要素であると言えよう。したがって、『和泉式部日記』に1例存在する〈ゆかし〉は、主体は作者和泉式部で、対象は表面、内容の両側面を持つと言える。

この『和泉式部日記』の〈ゆかし〉の用例を対象の主体、対象、対象の属性、関心の動機というふうに分析して表にしてみると、次のようになる。

〈表-2〉『和泉式部日記』の〈ゆかし〉

用例	主体	対象	対象の属性	動機
1	作者	宮の御けしき	表面、内容の両面	観察、(内容認識)内面心理の推察

上記のように、1例存在する用例が作者を主体に持って人間を対象にしていることが分かる。しかし、この用例は『枕草子』の場合と違って、対象自体が表面と内容の両方の側面を持ち、これにより対象に対する関心も表面と内容の両面に向けられていることが分かる。さらに、このような対象に対する関心の根本的な動機が前後文脈から見て、その対象となる人間（詳しくは敦道親王）に会いたいという対面への希望になっていることも、ひとつの特色と言えよう。したがって、同じ人間を対象にしている場合でも、その人間の表面にだ

5) 秋山虔編『王朝語辞典』による。

けその関心が向けられている『枕草子』の場合とは違う様相を見せていると言える。

2. 『紫式部日記』における〈ゆかし〉

『紫式部日記』にも〈ゆかし〉の用例は 1 例しか存在しない。

かからぬ年だに、御覧の日の童女の心地どもは、おろかならざるものを、ましていかならむなど、心もとなくゆかしきに、歩みならびつつ出で来たるは、あいなく胸つぶれて、いとほしくこそあれ。（『紫式部日記』〔三九〕童女御覧の儀一二十二日）

この『紫式部日記』における〈ゆかし〉の対象は、童女の外見というものごとの表面、形態になろうが、その意味合いにおいて少し違う様相を見せている。

童女御覧の見物に際して、作者紫式部は、童女の登場する前から、童女たちの気持ちが気になる。そういうところにこの〈ゆかし〉が使われている。この〈ゆかし〉の対象は、一次的には童女の外見と言えようが、作者の「童女の心地」が「いかならむ」という内面心理に関心が向けられている状況から、この童女の外見が見たいのは、その人たちの「内面心理」をうかがい知るための一次的通過点とみることができるのではないか。ということで、この『紫式部日記』における〈ゆかし〉の対象は、ものごとの表面、形態ではあるが、最初、童女の内面心理に対する関心から始まって、作者自身を省みるという前後文脈により、内面心理という内容的な面と深い関連を持つ表面と分類できよう。

以上、この『紫式部日記』の〈ゆかし〉の用例を表にしてみると次のようになる。

〈表-3〉『紫式部日記』の〈ゆかし〉

用例	主体	対象	対象の属性	動機
1	作者	童女の御覧の祭りの童女の外見	表面	内容認識（内面心理推察）

『紫式部日記』の〈ゆかし〉の用例の場合は、主体が作者で対象は表面的な側面を持ち、作者の関心や好奇心が表面に向けられていると見ることができるが前後文脈からその対象となる人物の内面心理推察がその動機であることが分かる。ということで結果的に〈ゆかし〉においては、人物の表面がその対象になるのであるが、作者の根源的な関心は対象の内面心理に向けられていることが前後文脈から分かり、〈ゆかし〉の対象と主体の関心の動機が一致しないという特異な様相を見せていることが分かる。このような様相は、人の表面から内面心理を見抜くという紫式部の個性を反映している一例として見ることもできよう。

3. 『更級日記』における〈ゆかし〉

ここからは、『更級日記』の〈ゆかし〉の用例を見てみることにしよう。『更級日記』には〈ゆかし〉の用例が12例存在する。

用例1

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、とところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。（『更級日記』冒頭）

用例1の〈ゆかし〉は、作者が主体で、対象は「物語」という書物であることが分かる。作者に、大人の姉、継母たちが物語の内容なるものを聞かせてくれて、物語に対する〈ゆかし〉さがまさると書いてあるから、この〈ゆかし〉の対象は書物を通して知ることができるといえる。したがって、『更級日記』における用例1の〈ゆかし〉は、主体が作者で対象は書物を通して知る、ものごとの内容と分類できる。

用例2

このをこの、かくひとりごつを、いとあはれに、いかなる瓢の、いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、御簾をおし上げて、『あのをこの、こち寄れ』と召しければ、かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、（〔四〕武蔵に入り、古伝説に旅情を慰む）

『更級日記』の作者は、上京途中、武蔵の国にさしかかる。そこで、竹芝という寺を見かける。その土地の古老が語ってくれる竹芝寺にまつわる古伝説の中の姫君がこの用例2の〈ゆかし〉の主体となる。姫君は、武蔵の国出身の火焚屋の衛士の故郷を恋しがる独り言を聞いて、その中に出てくる瓢が「いかになびくならむ」と好奇心を寄せる。すなわち、瓢のなびき様というものごとの表面、形態が、この姫君の〈ゆかし〉の対象になっていることが分かる。したがって、用例2の〈ゆかし〉の主体は古伝説上の人物である姫君で対象の属性は瓢および、瓢のなびき様というものごとの表面、形態と分類できる。

用例3

三月といふに武蔵の国に行き着きて、このをこのを尋ねるに、この皇女、おほやけ使を召して、『われさるべきにやありけむ、このをこのの家ゆかしくて、率て行けといひしかば率て来たり。（〔四〕武蔵に入り、古伝説に旅情を慰む）

用例3の〈ゆかし〉は、用例2の〈ゆかし〉が使われている古伝説の後半に使われて

いる。日焚屋の衛士の男の生まれ故郷の瓢の話に好奇心をあおられた姫宮は、やがてその衛士の生まれ故郷の武蔵の国に連れて行ってもらうことになる。三ヶ月をかけて都からこの衛士の男を捕まえに来た朝廷の使者に、姫宮は自身が武蔵の国まで来ることになった理由を述べる。ここに用例 3 の〈ゆかし〉が使われている。この〈ゆかし〉の対象のこの家は、この古伝説の内容から具体的には瓢のなびき様を指していると言える。したがってこの用例 3 の〈ゆかし〉は、主体は古伝説上の姫宮で、対象の属性はものごとの表面、形態と分類できる。

用例 4

その春、世の中いみじう騒がしうて、松里の渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。（〔一〇〕源氏物語を耽読して夢に浸る）

継母との別れ、乳母の死などを経験した作者は、「物語のゆかしさもおぼえずなりぬ」と物語に対する関心や興味もなくなってくる。このように、用例 4 の〈ゆかし〉も書物の物語が対象になるので、書物を読んで知る物語の内容に、その関心や興味が向けられていると言える。したがって、用例 4 の〈ゆかし〉の主体は作者で、対象の属性はものごとの内容と分類できる。

用例 5、用例 6

たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず。いとくちをしく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。まめめめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻を、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしきぞいみじきや。（〔一〇〕源氏物語を耽読して夢に浸る）

用例 5 〈ゆかし〉の主体は作者で、対象は「紫のゆかり」の「つづき」すなわち、物語になっていることが分かる。「紫のゆかり」の巻の「つづき」の内容に作者の関心や興味が向けられていると言えるので、対象はものごとの内容になる。したがって用例 5 の主体は作者で対象の属性はものごとの内容と分類できる。

用例 6 の〈ゆかし〉は「をばなる人」のセリフのなかで叙述されている作者が〈ゆかし〉の主体となっている。このセリフの中の「ゆかしくしたまふなる物」は、「をばなる人」が

物語を作者に与えるという内容の、後に続く文章の叙述から見て、それは他でもない物語であることが分かる。したがって用例6の〈ゆかし〉の主体は作者で、対象は物語、属性はものごとの内容と分類できる。

用例7、用例8、用例9

世の中に長恨歌といふふみを、物語に書いてあるところあなりと聞くに、いみじくゆかしけれど、えいひよらぬに、さるべきたよりを尋ねて、七月七日いひやる。

契りけむ昔の今日のゆかしさにあまの川波うち出でつるかな

返し、

たちいづる天の川辺のゆかしさにつねはゆゆしきことも忘れぬ（〔一三〕長恨歌の物語、十三夜の語り）

用例7の〈ゆかし〉の主体は作者本人である。対象は長恨歌という漢詩を物語ふうにしたものになり、その書物を通しての内容に作者の関心や好奇心が向けられていると言える。したがって、用例7の〈ゆかし〉は主体が作者で対象の属性はものごとの内容と分類できる。

用例8の〈ゆかし〉の主体は作者で対象「ちぎりけむ昔の今日」は物語に書いてある内容ということになるので、ものごとの内容と分類できる。

用例9は作者が送った歌に対する返歌を詠んだ人が〈ゆかし〉の主体になっている。対象は彦星と織姫が「たちいづる天の川辺」となっているが、作者の贈歌が物語を貸してくれることへの要望がその趣旨となっていることを考えればこれも物語を指していると言えよう。そういう物語の内容に〈ゆかし〉と書いているので、この用例9の場合もその対象の属性はものごとの内容と分類できよう。

用例10

「ありし時雨のやうならむに、いかで琵琶の音のおぼゆるかぎり弾きて聞かせむとなむある」と聞くに、ゆかしくて、われもさるべきをりを待つに、さらになし。（〔二五〕資通と語らう、時雨の夜の思い出）

用例10の主体は作者で対象は資通の弾く琵琶の音になりこれもまたものごとの表面的側面を持つ対象と言えよう。そしてこのような資通の演奏を聴くというのは、資通と会うことを意味し、このようなものごとの表面への関心が、前後文脈上会うことへの希望という動機によるということも注目すべきことであろう。

そして、新編古典文学全集の校注者は、この資通に関する記事に関して

周囲の人目に対する両者の配慮は、忍ぶ恋路にも似ていよう。事実、資通の描かれ方

は、作者にとって初めて巡り逢った「物語の男君」を思わせるものがある。だがすでに人妻であり、しかも夫不在中の宮仕えである作者の態度は、常に朋輩とともに行動する慎ましいものであった。足掛け三年にわたる、このほのかな憧れも、夫の上京とおぼしき年次を境に、過去の思い出ぐさとして記憶のうちに生き続けることになる⁶⁾。

と評しており、こういう評からも作者の物語志向の姿勢が窺われよう。そして、このような「物語の男君」を思わせる人物に関する記事に、主体の関心や興味を表す〈ゆかし〉が使われていることもやはり作者の物語志向の姿勢を窺わせると言えよう。

用例 1 1

ともに行く人々も、いとみじく物ゆかしげなるは、いとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかるをりに詣でむ志を、さりともおぼしなむ。（〔二七〕大嘗会の御禊をよそに、初瀬参籠）

大嘗会の御禊の当日、作者は初瀬詣での精進のために、京を立つことにする。これにより大嘗会の見物ができなくなってしまった同行する人たちの気持ちを推察するところに、この〈ゆかし〉が使われている。したがってこの〈ゆかし〉の主体は作者の初瀬詣でに同行することになった「ともに行く人々」で対象は大嘗会の様子という表面的な側面を持つものと分類できよう。

用例 1 2

むごにえ渡らで、つくづくと見るに、紫の物語に宇治の宮のむすめどものことあるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。（〔二七〕大嘗会の御禊をよそに、初瀬参籠）

初瀬詣でに行くために、宇治の渡し場で舟を待つ作者。その間作者はこの辺りの風景を眺めながら、以前から『源氏物語』ゆかりのこの辺りの風景を見てみたかったと述懐するところに〈ゆかし〉が使われている。したがって〈ゆかし〉の主体は作者で、対象は宇治の渡し場の風景となり、表面的な側面を持つと言える。そしてこのような宇治辺りの風景に対する関心や好奇心の裏に『源氏物語』が存在するのも作者の物語志向の姿勢が現れているという面で興味深いことであると言える。

『更級日記』の〈ゆかし〉の用例は 1 2 例も存在しており、平安女流日記のなかで〈ゆかし〉の用例がもっと多く使われていることが分かる。これらの用例を表にしてみると次のようになる。

6) 同書338頁からの引用

〈表-4〉 『更級日記』 の 〈ゆかし〉

用例	主体	対象	対象の属性	動機
1	作者	物語	内容	内容認識 (書物による)
2	姫宮 (古伝説上の人物)	瓢のなびき様	表面	表面観察
3	姫宮 (古伝説上の人物)	この家 (厳密には瓢のなびき様)	表面	表面観察
4	作者	物語	内容	内容認識 (書物による)
5	作者	物語 (源氏物語のゆかりのつづき)	内容	内容認識 (書物による)
6	作者 (親類の談話上)	物語	内容	内容認識 (書物による)
7	作者	物語 (長恨歌の物語)	内容	内容認識 (書物による)
8	作者	物語 (ちぎりけむ昔の事が書いてある)	内容	内容認識 (書物による)
9	返歌の送り主	物語 (たちいづる天の川辺のことが書いてある)	内容	内容認識 (書物による)
10	作者	琵琶の音	表面	対面
11	ともに行く人々	行事の模様	表面	表面観察
12	作者	宇治の渡し場辺りの源氏物語ゆかりの風景	表面	表面観察

ここで特記すべきことはまず「琵琶の音」という音を対象に持つ例が存在することである。このように音を具体的な対象として持つ用例は『枕草子⁷⁾』や、その他の当時の女流日記には存在しない。そして、一番目立つ特徴は作者を主体に持つ8例の用例中6例が物語を対象に持っているし、残りの2例も何らかの形で関連を結んでいることが分かる。このように対象に対する関心や好奇心を表す〈ゆかし〉の用例において作者の物語に対する高い関心度が現れているのはとても興味深いことであると言わざるを得ない。

4. 『讃岐典侍日記』における〈ゆかし〉

『讃岐典侍日記』には〈ゆかし〉の用例が5例存在する。

7) 『枕草子』の〈ゆかし〉用例16(女房たち主体)の場合は、鼓の音が好奇心の触発要因にはなるが、最終的な対象は鼓の形となるので、この用例とは性格を異にすると判断される。

用例 1

かやうに、いみじき人たちあまたさぶらひて、われも劣らじと祈りまゐらせらるるけにや、御物の怪あらはれて、隆僧正、頼豪など、名のりのしる人、あらはれさせたまて、「一年の行幸ののち、また見まゐらせばやと、ゆかしく思ひまゐらするに、その徳なれば、おどろかしまゐらするぞ」といふを聞かせたまひて、（〔一三〕物の怪現れて、名のりさわぐ）

用例 1 の〈ゆかし〉の主体は「物の怪」で、対象は堀河天皇の外見になるので表面的な側面を持つ対象と言えよう。この外見に対する好奇心は会うことへの希望による関心や好奇心と言えよう。

用例 2

片時離れまゐらせず、あやしの衣のなかよりおほしまゐらせて、いづれの行幸にも離れず、後に立ち先に立ち、病の心ならぬ里居十日ばかりするにも、恋しくゆかしく思ひまゐらせつるに、片時見まゐらせで、いかでかさぶらはん。（〔一九〕人々、声をあげて泣きさわぐ）

用例 2 の〈ゆかし〉の主体は大貳の三位、対象は堀河天皇で、大貳の三位が不本意な里居中も堀河天皇に「お目にかかりたい」という内容になっているので、〈会う〉ことへの希望による〈ゆかし〉と言える。

用例 3

「故院の御かたみには、ゆかしく思ひまゐらすれど、さし出でんこと、なほあるべきことならず。（下〔一〕鳥羽天皇への出仕を仰せられて悩む）

用例 3 の〈ゆかし〉の主体は作者本人で、対象は鳥羽天皇になっている。ここでも、用例 2 のように鳥羽天皇を対象にして「お目にかかりたい」という内容になっているので、ここでも「会う」ことへの希望がその動機となっていることが分かる。

用例 4

女房たち、われもわれもと、「御覧の日の童とて、ゆかしきこと。寅の日の夜、すでに例のことなれば、殿上人、肩脱ぎあるべければ、いづれよりかのぼるべき」と問ひあはれたれば、いらへせんともおぼえず。（下〔二〇〕五節、臨時の祭、近づく）

用例 4 は主体は女房たちで、対象は童御覧の様子となっている。この〈ゆかし〉は観察、鑑賞への希望がその動機となっていることが分かる。

用例 5

日かげをもろともにつくりて、結びるさせたまひたりしことなど、上の御局にて、昔思ひ出でら

れて、ものゆかしもなき心地してまでなど。（下 [二一] 五節につけて、ありし日の雪の朝を思う）

用例5の主体は作者で対象は五節の行事の様式となっている。対象は形態的な側面を持つと言えるが、否定形となっており、作者の関心の対象になるとは言えない。

『讃岐典侍日記』の〈ゆかし〉の用例を表にしてみると次のようになる。

〈表-5〉 『讃岐典侍日記』の〈ゆかし〉

用例	主体	対象	対象の属性	動機
1	物の怪	堀河天皇	表面	対面
2	大弐の三位	堀河天皇	表面	対面
3	作者	鳥羽天皇	表面	対面
4	女房たち	童御覧の様子	表面	表面観察
5	作者（否定用例）	五節の行事の様式	表面	表面観察

この『讃岐典侍日記』の〈ゆかし〉の用例においてまず特徴として挙げられるのは、「物の怪」を人格化した叙述の中に、「物の怪」が〈ゆかし〉の主体として使われている点である。そして、全体の用例としては、全用例の5例中の4例が人間を対象に持っている点であるが、その中の3例の関心の動機が会うという意味の対面となっている点であろう。その点においては、『和泉式部日記』の1例の用例と共通点を持つと言える。しかし、同じ対面という動機ではあっても、『和泉式部日記』における対面は、恋人同士の対面であって、『讃岐典侍日記』の場合は宮仕え人とその主君同士の対面というふうに区別することができよう。ということで、『讃岐典侍日記』の〈ゆかし〉の用例の特徴は「物の怪」が〈ゆかし〉の主体となっている点、人間を対象に持つ場合、宮仕え人とその主君同士の対面という動機となっている点などが挙げられよう。

おわりに

『枕草子』及び同時代の女流日記の〈ゆかし〉の考察を試みたところ、

『枕草子』においては、作者が中宮一家の服装や振る舞いなどを〈ゆかし〉の対象にしている点、『和泉式部日記』においては、作者の敦道親王への恋しい気持ちが〈ゆかし〉の関心の動機として現れている点、『紫式部日記』では、作者の人間に対する洞察

力が〈ゆかし〉の関心の動機から現れている点、『更級日記』では作者の物語に対する関心が〈ゆかし〉の対象や関心の動機に現れている点、そして、『讃岐典侍日記』では、作者の宮仕え生活という作品の主題が〈ゆかし〉の対象や関心の動機に現れている点など、この〈ゆかし〉ということばがそれぞれの作品の主題や作者の人物的個性と関連を結んでいる点などが見つかった。

そして、枕草子用例 1（1 5 3 段）の〈ゆかし〉の対象の羅列において表面的な属性の対象が優先的に羅列されていることも『枕草子』の〈ゆかし〉に現れている作者のものに対する関心のあり方の一特徴と言える。

特に、作者を主体に持つ用例中人間を対象にしている 6 例中 5 例という高い割合で、その対象の属性が表面になっており、人間に対する関心においても、その関心が人間の表面に向けられている点は特記すべきことである。そして、その残りの 1 例も対象の内面心理などにはその関心が向けられておらず、『枕草子』〈ゆかし〉の全用例中の 1 例も人間の内面心理に直接その関心が向けられている例が存在しないことが分かり、こういった点は、『和泉式部日記』『紫式部日記』の 1 例しかない用例が人物を対象にしており、その根源的関心が内面心理に向けられていることは明確に区別をなした様相を見せていると言える。また、このように人間の表面にだけ関心（動機を含めて）が向けられている用例が、同時代の女流日記の用例との比較において『枕草子』にしか存在しないという点も注目すべきことであると判断される。

このような〈ゆかし〉に現れた作者の関心のあり方の一面は、「誰もみつれど、いとかう縫ひたる糸、針目までやは見とほしつる（『枕草子』7 9「返る年の二月二十日余日）」という作者の表面観察能力への周りの評価と無関係とは言えない。以上のような〈ゆかし〉の用例分析および比較を通して、『枕草子』の表現的特徴と関連のある作者の人物的個性の一断面が見つかったのは、本研究における一成果と言える。

【参考文献】

- 東節夫編(1956)『更級日記総索引』、武蔵野書院
- 榊原邦彦編(1967)『枕草子総索引』、右文書院
- 佐伯梅友 伊牟田経久編(1981)『かげろふ日記総索引』、風間書房
- 北村英子(1987)「『枕冊子』における「ゆかし」の考察」、樟蔭国文学24号
- 伊藤鉄也編(1991)『和泉式部日記一四本対照 校異と語彙索引』、和泉書院
- 藤岡忠美 中野幸一 犬養廉 石井文夫 校注・訳(1994)日本古典文学新編全集
『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』、小学館
- 今西祐一郎編(1997)『紫式部日記語彙用例総索引』、勉誠社
- 松尾聡 永井和子 校注・訳(1997)日本古典文学新編全集『枕草子』、小学館
- 鎌田広夫 相沢鏡子編 (1998) 『讃岐典侍日記 本文と索引』、おうふう
- 中村幸彦 岡見正雄 阪倉篤義 編(1999)『角川古語大辞典』、角川書店
- 秋山虔編(2000)『王朝語辞典』、東京大学出版会

要 旨

〈ゆかし〉は「心が対象へ自然にひかれていくさまを表す」ことばで、文脈に応じて見たい、知りたい、聞きたいというふう现代語訳できる。したがって、この〈ゆかし〉ということばにはその主体となる人物の、対象に対する好奇心や関心の気持ちが現れていると言える。ということは〈ゆかし〉の対象への考察はその主体となる人物がどのようなものに心がひかれているかを知るひとつの手がかりとなるということが言えよう。ということで、『枕草子』や同時代の女流日記のそれぞれの〈ゆかし〉の用例の主体、対象、対象の属性、心がひかれる動機などを用例別に分析、そこに現れる〈ゆかし〉の用いられ方を比較・考察してみたところ、

この〈ゆかし〉ということばがそれぞれの作品の主題や作者の人物的個性と関連を結んでいる点などが見つかった。そして、『枕草子』において、作者を主体に持つ用例中人間を対象にしている6例中5例という高い割合で、その対象の属性が表面になっており、人間に対する関心においても、その関心が人間の表面に向けられている点は特記すべきことである。そして、その残りの1例も対象の内面心理などにはその関心が向けられておらず、『枕草子』〈ゆかし〉の全用例中の1例も人間の内面心理に直接その関心が向けられている例が存在しないことが分かり、こういった点は、『和泉式部日記』『紫式部日記』の1例しかない用例が人物を対象にしており、その根源的関心が内面心理に向けられていることは明確に区別をなした様相を見せていると言える。また、このように人間の表面にだけ関心（動機を含めて）が向けられている用例が、同時代の女流日記の用例との比較において『枕草子』にしか存在しないという点も注目すべきことであると判断される。

このような〈ゆかし〉に現れた作者の関心のあり方の一面は、作者の表面観察能力への周りの評価と無関係とは言えない。〈ゆかし〉の用例分析および比較を通して、『枕草子』の表現的特徴と関連のある作者の人物的個性の一断面が見つかったのは、本研究における一成果と言える。

キーワード : 枕草子、ゆかし、枕草子の表現、清少納言の関心、清少納言の好奇心、清少納言の人物的個性、枕草子と平安女流日記

투 고 : 2008. 2. 29
1차 심사 : 2008. 3. 15
2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : 韓國 忠南 天安市 新富洞 大林APT205-1101
電 話 : 010-8800-5236
e-mail : makura2000@hotmail.com